
雨と青いビニール傘

雨宮ねおん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨と青いビニール傘

【Nコード】

N8793A

【作者名】

雨宮ねおん

【あらすじ】

受験に悩む高校三年生の高弘^{タカヒロ}。なんとなく家を抜け出して行った公園で青いビニール傘を持った不思議な女の子に出会い……。

夏だというのにまだ梅雨を引きずっているかのように雨が降っている。

二、三日雨が振り続いていたが、やっと晴れ間が見えた。
アスマ タカヒロ

東 高弘は気分転換に散歩にでもいこうかと、こっそり家を抜け出した。こっそり行かないと親が煩い。『勉強は?』とか『あんた受験生なの分かってるの?』とか。

勿論そんなのは高弘にも分かっている。……でも、やる気が出ない時にあがくのは逆効果だ。

「はあ…」

誰もいない公園に足を踏み入れ、高弘は大きなため息をついた。「やってらんないよな…まったく」

ぼやいてから適当にブランコに座った。少し湿っていたが特に気にしない。

ギコギコ、と頼りない錆び付いた音だけが公園に響く。

ブランコはこんなに古かったのだろうか、と高弘は少し寂しくなった。

「このブランコはね、近々新しくなるの」

「……え?」

急に後ろから声をかけられ、驚いて後ろを振り向く。

いつからいたのか青いビニール傘をさした女の子が、高弘を見て笑っていた。

袖口と裾にフリルのついた薄い水色のワンピースを着て、髪は二つに結っている。高い所で結っているのに真っ直ぐな髪は肩に触れるくらい長い。

年はおそらく高弘と同じくらい。

「ねえ。隣、座ってもいい?」

「あ、いいけど…濡れてるかも…」

女の子は大丈夫よと笑って、傘を閉じてから隣のブランコに腰かけた。

高弘は急な女の子の出現に、何を話してよいものかと考え込んでいた。

「千思万考してたりする？」

「へ？ センシ……？」

女の子の突拍子もない言葉に高弘は呆気にとられる。女の子はくすくすと笑ってブランコを揺らした。

「センシバンコウ。あれこれ考えを巡らすことよ」

「そ、そうなんだ…」

女の子の不思議なテンションに高弘は全くついていけない。

「えっと…君はこの近くに住んでるの？」

「そうよ。あたしは雨っていうの。あなたは？」

「雨さんか…。あ、俺は東高弘。」

高弘は、雨は彼女にぴったりの名前だなと思った。

「高弘くんはなんでここにいるの？」

「…なんとなく、かな」

まさか受験勉強が上手く行かなくて、気分転換に家を抜け出して来たなんて言えない。

「誰かとケンカしたでしょ」

なかなか鋭い。

雨は小さく笑ってブランコを揺らした。

「別に…ケンカとかじゃないけど…」

「そっか。まあ、気を落とさないでね」

雨は高弘が何に悩んでいるか分かっているのかもしれない。高弘は不思議な気分になった。

「雨が降っていると余計に憂鬱だよ」

「そうかしら？ あたしは雨好きだけど」

「名前が同じだからとか？」

高弘が尋ねると雨は少し悩んでブランコから立ち上がる。

「うーん、それもあるかもしれないけど…。雨の日はなんか落ち着いてるからかな」

確かに、雨の日は静かだ。人間も、鳥も、虫も皆屋根のしたでじつと雨が上がるのを待つから。

「高弘くん。もうすぐ雨が降るから、早く帰った方がいいかも」

雨が青いビニール傘を開いて、くるくると回す。

空は雨の言うとおりに、向こうから黒い雨雲がまたこちらへ向かって来ていた。

「じゃあ：帰るかな」

高弘は家に帰ってからのことを想像し、頭が痛くなりそうだった。積み上げられた参考書に、母親のうるさい声。

「あのね、ちよっと聞いて」

雨が高弘を呼ぶ。

ぽつりぽつりと小雨が当たってきていた。

「周りをよく見て、深呼吸するの。友達は見ちゃだめ。高弘くんは高弘くんなんだから。それでね、どれでもいいから一つ、頑張ってみる。分かんなくなったらいいから、頑張ってみる」

高弘は啞然として話を聞く。雨は何者なんだろう、人の心が読めるのかもしれないと思った。

「お母さんには辛く当たっちゃだめ。そうしてればいつかは分かってくれるよ」

雨は傘を一回くると回して、高弘に差し出した。

「あげる。あと、雨の日は五分でいいから外を眺めて。とっても落ち着けるから」

雨は高弘が傘を受けると満足そうに微笑んで、公園の出口に向かって歩いて行った。

「…」

高弘はしばらくぼーっとしていたが、角を曲がって雨が見えなくな

ると、はっとしてその後を追った。

全速力で走って、角を曲がる。

「あれ？」

誰もいない。

雨のことは夢かとも思ったが、手には青いビニール傘。

雨足が強くなってきた、高弘は慌てて傘差して家へ走り帰った。

あの不思議な一件から、雨に言われた通り高弘は少しずつ勉強するようになった。

勿論、雨の日には空を眺めて。

あれ以来、あの公園には行っていない。傘は玄関で静かに雨が降るのを待っている。

雨は一体何者だったのか。

今日は雨が降っている。高弘はシャーペンを置いて立ち上がった。

「母さん、ちょっと散歩してくる」

いつてらっしゃいという声を背中に、高弘は青い傘と自分の黒い傘を持って玄関を出た。

今日はもしかしたらまた公園に彼女がいるかもしれない。

そうしたら傘を返そう。お礼を言って傘を返そう。

冷たい雨は、冬の訪れを告げるように、しとしとと降り注いでいた。

f i n . . .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8793a/>

雨と青いビニール傘

2011年6月21日12時43分発行